

佐藤 忠良

技を磨き続けた職人彫刻家



佐藤忠良 (宮城県美術館提供)

日本人として初めてパリ・ロダン美術館で個展が開かれるなど、世界的に高い評価を受けながら、自らを「職人」と呼び、文化功労賞など様々な賞を辞退した彫刻家がいきました。

「わたしたち彫刻家のやっているのは、粘土こねて、彫かいて、汗かいて、失敗して、やり直す、職人の仕事なんです。」

も出品していた佐藤忠良です。

佐藤忠良は、明治四十五(一九一二年)、黒川郡落合村(現在の大和町)で生まれました。忠良が六歳の時、農学校の教師をしていた父が病気で亡くなり、忠良と弟は、母に連れられ北海道に移住しました。母は和裁を教えたり、着物を仕立てたりしながら、大変な苦勞をして忠良と弟を育てました。

幼いころから絵を描くことが大好きだった忠良は、札幌の学生時代に絵の才能を開花させ、公募展で連続入賞するほどの腕前になりました。「絵描きになりたい」という気持ちがおさえられなくなった二十歳の秋、「とにかく東京へ出て、専門家のもとで、ちゃんと絵を学びたい。」

という忠良に、母は苦しい生活にもかかわらず、「やってごらん。」

と送り出してくれました。

忠良は、日本の文化の中心である東京で様々な美術を学んでいくうちに、ロダンなどの近代彫刻と出会い、



「恥かけ 汗かけ 手紙かけ (水仙)」
(宮城県美術館所蔵)

そのすばらしさに心打たれて、彫刻家を志すようになりました。そして、生き生きとした人間の顔や像を次々と作り、日本を代表する彫刻家になったのです。

「恥かけ、汗かけ、手紙かけ」これは忠良の口ぐせで、学生や若い人たちへ贈る色紙などによく書いていた言葉です。「恥かけ、汗かけ」とは、頭で考えるだけでなく、体を動かし、体験から学ぶことの大切さと、失敗をおそれずに挑戦することの大切さを伝えていきます。

ある時、東京造形大学の教授となった忠良のアトリエに学生たち

がやってきました。

「先生、これ、見てもいいんですか。」

アトリエには、やりかけの彫刻も隠すことなく全部置かれています。目を丸くして聞く学生に、忠良は黙ってうなずきます。(こつこつやってみる。それだけでも覚えてもらいたい。) 忠良の胸には、そんな思いがありました。うまくいかなければやり直す。地道な作業を、何度も何度も繰り返す。もつともつとよい作品をめざして。忠良はこのことを学生たちに伝え、自らも体現してきたのです。

忠良は彫刻だけでなく、新聞や雑誌の挿絵や絵本の絵も描きました。特に『おおきなかぶ』の絵本の絵は、みなさんもきっと見覚えがあることでしょう。

『おおきなかぶ』制作中、アトリエを訪れた絵本の編集者の目に、大きな鏡の前に立つ忠良の姿が飛びこんできました。

「こうかな。いやちがう。」



『おおきなかぶ』絵本原画 (宮城県美術館所蔵)

個展：一人の作品だけを集めて開く展覧会。文化功労賞：文化の発展のために、特に大きな功績のあった人に贈られる賞。

和裁：和服を制作することやその技術。

公募展：広く一般から募集した展覧会。

ロダン：近代彫刻の元を作ったフランスの彫刻家。

アトリエ：芸術家が作品を制作する作業場。

体現：自分の考えを具体的ななかにあらわすこと。

(先生は何をしているのだろうか。)
「おじいさんがかぶを引っぱったと書いてあるのに、これでは、かぶを抜いているのではなく、押しているように見えてしまうな。」

かぶを引いているかっこうをしては絵を描き、描いてはまた鏡の前に立つ。何度も何度も絵を描き直す忠良をじっと見ていた編集者は、いつしか胸がいっぱいになり、言葉を失いました。

宮城県立こども病院の玄関に飾る『おおきなかぶ』のレリーフを作っていた時にも、こんなことがありました。「かぶを抜いているように見せるために、腕や脚の位置をそれらしく一部だけでも手直ししたりすると、それにつられて上半身や頭の具合なんかも不自然に見えてきて、結局体全体を直すようになる……。それで、そんなことを繰り返していると、きりがなくなつて、なかなか仕上がらないんですね。」

制作の様子を近くで見ている人には完璧に見える作品も、忠良には納得がいかず、完成間近の作品も、何度も何度もこわして作り直しました。実に忠良、九十一歳の時のことです。

「恥かけ、汗かけ、手紙かけ」の「手紙かけ」とは、親や周りで支えてくれている人への感謝を忘れず、感謝の思いを表現することの大切さを伝えていきます。

忠良のこの思いが強く感じられる作品があります。三十歳の時に作った『母の顔』という作品です。

世の中が戦争一色となったころ、忠良は母の顔の像を作ることになりました。大変な苦勞をして自分を育ててくれた母。息子の夢をかなえるために、貧しい生活の中でも背中を押し続けてくれた母。その母の顔を。

当時はアトリエもない小さな家でしたので、母には縁側の日陰げになるところに座ってもらい、忠良は日なたの庭で、麦わら帽子をかぶ



「母の顔」(宮城県美術館所蔵)

り、作品に取りかかりました。日当たりがよくて、こねている粘土はすぐに乾いてしまいます。水をかけては作り、また水をかけては作る。母の顔を見つめながら。じりじりと焼けるような太陽の下で、忠良のひたいを汗がいくすじも流れていきました。

この作品は、後にフランス、パリの国立ロダン美術館で開かれた日本人初の個展でも、見る人の心を打ち、大きな賞賛を受けました。

実際のところ、忠良は大変な筆まめで、心動かされることがあるとすぐに筆をとり、一字一句に感謝の思いをこめながら、はがきや手紙を書いていたそうです。

平成二(一九九〇)年、宮城県美術館に「佐藤忠良記念館」が併設されました。宮城県に忠良の作品や考え方に共感する人がたくさんいて、「生誕地に美術館を。」という動きが起ったのです。初めは遠慮していた忠良でしたが、周囲の熱い想いに応え、自分の彫刻や絵本の原画だけでなく、長年収集してきたピカソやシャガールなどの美術作品までも、生まれ故郷の記念館に寄贈することにになりました。あの「母の顔」像も、展示室の入り口で、静かにあたたかな光を放っています。

記念館は今も訪れる人々に、彫刻家としてだけではなく、忠良の人間としての魅力を伝えていきます。そして、日本のあちらこちらの街角で、美術館で、忠良の作品は、今もわたしたちに人として大切なことを、そっと語りかけてくれているのです。



佐藤忠良記念館(宮城県美術館提供)

佐藤 忠良

佐藤 忠良は、明治四十五(一九一二年)年、黒川郡落合村(現在の大和町)に生まれた。幼少のころを父の実家である伊具郡大張村(現在の丸森町大張)の豊かな自然の中で過ごした。自らを職人と呼んで、彫刻の技をみがいた。人間愛、自然愛にあふれた多くの作品をつくり、全国各地に展示されている。また、絵本『おおきなかぶ』の挿絵を描くなど、子どもたちの感性を豊かに育むための美術教育にも力を注いだ。

筆まめ…

めんどくさがらずに、よく手紙や文章を書くこと。

一字一句…

一つの字、一つのこぼれ。

併設…

主なるものにあわせて設置、または整備すること。

生誕地…

生まれた土地。